

# 他者のための贖い—苦難の意味の積極的解釈にむかう ヨブ記 19章23-29節の一試論

本 多 峰 子

まず最初に、本論で扱うテキストとその新共同訳での邦訳を提示しておく<sup>1)</sup>。

Job 19:23-29

23 מִי־יִתֵּן אִפּוֹ וַיִּכְתְּבוּן מִלִּי מִי־יִתֵּן

בְּסֵפֶר וַיַּחֲקִי:

24 בָּעֵט-בְּרוּל וְעִפְרַת לְעֵד בְּצוּר

יַחֲצִיבוּ:

25 וְאֲנִי יִדְעֵתִי נֶאֱלִי חַי וְאַחֲרוֹן עַל-עֵפֶר

יָקוּם:

26 וְאַחֲרַי עוֹרֵי נִקְפוּ-זֶאֱת וּמִבְּשָׂרִי אֲחִיזָה

אֱלֹהִים:

27 אֲשֶׁר אֲנִי אֲחִיזָה-לִי וְעֵינַי רָאוּ וְלֹא-אֶזְכֹּר

כָּל־כְּלִיתִי בַּחֲקִי:

28 כִּי תֹאמְרוּ מִה-נִרְדָּף-לִי וְשֹׁרֵשׁ דָּבָר

נִמְצָא-בִּי:

29 גִּדְּרוּ לָכֶם מִפְּנֵי-חֶרֶב כִּי-חֲמָה

עֹנֹת חֶרֶב לְמַעַן תִּדְּעוּן

(שְׂדֵיךְ) [שְׂדֵיךְ]: 5

19:23 どうか／わたしの言葉が書き留められるように／碑文として刻まれるように。

19:24 たがねで岩に刻まれ、鉛で黒々と記され／いつまでも残るように。

19:25 わたしは知っている／わたしを贖う方は生きておられ／ついには塵の上に立たれる

であろう。

19:26 この皮膚が損なわれようとも／この身をもって／わたしは神を仰ぎ見るであろう。

19:27 このわたしが仰ぎ見る／ほかならぬこの目で見る。腹の底から焦がれ、はらわたは絶え入る。

19:28 「我々が彼を追いつめたりするだろうか」と／あなたたちは言う。この有様の根源がわたし自身にあると／あなたたちは言う。

19:29 あなたたちこそ、剣を危惧せよ。剣による罰は厳しい。裁きのあることを知るがよい。

## <序>

### ヨブ記の性質と本論の目的

ヨブ記は、義人の苦難の問題を扱う神義論的主題の書と見られる。ヨブの苦難に対して、この書全体を通して、友人やヨブ自身が様々なその原因や結末を考え、提示する。

ヨブ記の、そして特にヨブの友人たちの思想の根底にあるのは、いわゆる「禍の神義論」<sup>2)</sup>である。つまり、申命記の以下の箇所から導かれるように、人の幸不幸はその人の神に対するあり方によって左右される、それゆえ、人の苦難はその人の罪過に対する罰であるという見方である。

見よ、わたしは今日、あなたたちの前に祝福と呪いを置く。あなたたちは、今日、わたしが命じるあなたたちの神、主の戒めに聞き従うならば祝福を、もし、あなたたちの神、主の戒めに聞き従わず、今日、わたしが命じる

道をそれて、あなたたちとは無縁であった他の神々に従うならば、呪いを受ける。(申命記 11:26-28)

しかし、ヨブの苦難が彼の罪の故ではないことは、この書の冒頭ではっきりと読者に示されている。ヨブの苦難は、神がサタンに許可を与えてヨブを試みさせたからである。ヨブが正しいことは、冒頭に語り手が全知の視点で語る「ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた」(1:1)や、同じく1章の8節「主はサタンに言われた。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」」に明らかに示されている。この語り手と神である「主」の言葉は、読者がそのまま真実として受け取るように意図されており、そのとおり取るべきであろう。ヨブ記は、義人の苦難の問題を扱った書であることは確かであり、禍の神義論が成り立たない状況における苦難の意味を問う問いかけの書である。そこで、ヨブは、神を絶対的に信じつつ、その一方で、自分の苦難の原因が神であることもまた、疑っていない。そして、神に反抗しつつ、しかも従い続けようとしているのである。これは、アウシュヴィッツを見てその究極の責任が神にあると信じ、しかもその神が神として存在するということも信じるJ.K.ロスの抗議の神議論<sup>3)</sup>の原型とも考えられよう。

中世のユダヤ人訳注解者サーディア(Saadia)によるユダヤ教の注解で「ヨブ記」を参照してみると、それは明白に分かる。新共同訳で

わたしが話しかけたいのは全能者なのだ。

わたしは神に向かって申し立てたい。(13:3)

と訳出されているヨブの言葉の、「神に向かって申し立てたい」וְהוֹכַח אֶל-אֱלֹהִים אֶחָפֶז、英訳の欽定訳聖書では I desire to reason

with God (神と論じたい) となっているが、サーディアの訳を英訳で見ると、I desire to confront the Almighty 「全能者に立ち向かいたい／相対したい」となっている<sup>4)</sup>。また、神がヨブを「全能者と言い争うもの」(40:1)と呼ぶ箇所は、欽定訳では contendeth with が用いられ、邦訳と同様「言い争う」という意味であり、確かにそこにも神と相対するという態度は読み取れるが、ユダヤ教のサーディアの訳ではやはりここも confront という語が用いられて、神に面と向かって立ち向かう者、という解釈がはっきりと出ている<sup>5)</sup>。英訳でしばしばヨブの義と信仰の堅さを最もよく示すと見られる 13:15-16 Though he slay me, yet will I trust in him (欽定訳。「神はわたしを殺すかもしれないが、それでもわたしは神を信頼する」)の箇所には、サーディアは、「神がわたしを殺そうとも、わたしは神を待ち望む。そして、必要ならば、神に相対して confront 立ち向かうつもりだ(面と向かう程度の意味か?)」という意味であると注をつけている。最近では、欽定訳は誤訳とされ、この箇所は See, he will kill me; I have no hope; but I will defend my ways to his face. (NRSV新改定標準訳。「見よ。神はわたしを殺すであろう。わたしには望みはない。しかし、わたしは自分の道を神の御顔の前に弁護する」)などとなっている。そして、邦訳でも、「神はわたしを殺されるかもしれない。だが、ただ待つてはいられない。わたしの道を神の前に申し立てよう」になっている。しかしそれでも、これらの訳とサーディアとの違いは残る<sup>6)</sup>。

苦難に際して神に問いかけ、神を責めながらも堅く神を信頼する態度は、ユダヤ教の人々に顕著に見られる。アウシュヴィッツを生き延びたユダヤ人作家で、ノーベル平和賞を受賞したエリー・ヴィーゼは、このように言っている。

ユダヤ人の歴史は神との絶えざる口論以外の何であろうか？パスカは別の言い方でこう

言っている。「ユダヤ人の歴史は、神との長い恋愛に他ならない」。そして、すべての恋愛の例にもれず、口論と和解があり、更なる口論と和解がある。けれども、神もユダヤ人も、相手を放棄する事は決してないのだ<sup>7)</sup>。

ヨブ記をこのような緊張を含んだ書として読み、その解釈のひとつの鍵となると考えられる19章23—29節の解釈を通じて、ヨブの到達したひとつの苦難理解を提示するのが本書の目的である。

### <釈義>

#### 19章の文脈と様式

本論で扱う19:23-29を含む19章は、文章の形式の上では、A.ワイザーが指摘するように<sup>8)</sup> 全体でひとつの嘆きの詩篇の形をとっている。2—5節の導入部で、ヨブは友人から新たに加えられた攻撃と屈辱に防戦し、「どこまであなたたちはわたしの魂を苦しめ、言葉をもってわたしを打ち砕くのか。侮辱はもうこれで十分だ。わたしを虐げて恥ずかしくないのか。 […] あなたたちは、わたしの受けている辱めを誇張して、論難しようとする」と抗議している。これは、友人たちがヨブの苦境を彼が犯した何らかの罪に対する罰に違いないと考えてヨブをたしなめることに対する抗議、つまり、上記で述べた「禍の神義論」に対する抗議である。ヨブは、ヨブ自身が考えても実際犯したか否かも正確には分からない罪に対して子孫に至るまでの罰をほめかすような友人の態度が誤っていることを言明する。

6—22節で、ヨブは友人たちに対しもう一度、神が自分を苦しめているのは神の「非道なふるまいである」（19:6）という観点から自分の状況の説明を試みる。「神はわたしに向かって怒りを燃やし／わたしを敵とされる」（19:11）と彼は言う。その結果、自分は兄弟からも、親族からも、友人からも見捨てられ、忘れられ、妻には嫌われ、子供にさえも憎まれている<sup>9)</sup> と嘆

く。そして、友人に憐れみを乞い求めつつまったく見捨てられている、という印象のもとに終わる。

そして、これから見ることを一部先取りして言えば23—27節でヨブは立ち上がり、祈願と神への信仰の大胆な確信を表明し、28—29節が結びとなる。

「嘆きの詩篇」の様式では、途中で嘆きから信仰への転調がある。このヨブ記19章でも、19:23以降は、19:2-5での友人たちへの抗議および19:6-22の絶望的な嘆きの継続ではなく、転調として読むべきである。

#### 19:23-24

22節までは、ヨブの孤独な抗議の言葉が畳み掛けるように続けられていた。23節はそこから転じて、希望に向かう転換点となる。ヨブは、自分の義を訴える言葉が永久に残るように、鉄筆と鉛でしっかり岩に刻みつけられるよう願う。23節後半の **סֵפֶר וְיִתְּנֵנִי בְּסֵפֶר וְיִתְּנֵנִי** は、**סֵפֶר** を「書物（あるいは巻物）」とすると意味を成さないで、「書かれたものとして刻まれるように」という意味にとり、新共同訳のように「碑文として刻まれるように」というように解釈する。これは同じ詩行の前半と同じことを異なる言葉で繰り返し、強調しているものである。

「鉛で黒々と記され」と訳されている「鉛」 **עֹפֶרֶת** には、①書かれる板の素材 という説、②彫られる文字の下書きに用いられたという説、③彫られた文字に鉛を流し入れ、太陽に照り輝いて目立つようにされた、という説があるが、本論ではハートレイ<sup>10)</sup> に同意して、③と解釈する。ヨブは3回、同じことを言葉を変えて祈願しているのであり、非常に強い祈念となっている。

#### 19:25

ヘブライ語は本来主語が要らない言語であるから、冒頭の **אֲנִי**（しかし私は）の **אֲנִי** は強調であり、すべての絶望にもかかわらず、「私は、

知っている」との確信を表す。この「**נֶאֱלֵם**」は、新共同訳には訳出されていないが、「しかし」あるいは「それでも」と訳出したい。絶望に抵抗して希望を持つ強い意志が込められている語である。

25節で問題となるのは、「**נֶאֱלֵם**」の解釈である。この語自体の意味の解釈も、これが誰を指すのかも、解釈が分かれる。この語から接尾辞をとった「**נֶאֱלֵם**」は、「**נֶאֱלֵם**」の能動分詞から来ており、まず、「一番の近親者として行動する者」、具体的にはその行動は、レビラート婚<sup>11)</sup>で子孫を残す(ルツ3:13)ことから、身売りした親族を買い戻す(レビ25:48)、親族が売り払った土地を買い戻してやる(レビ25:26etc.)、近親の血の復讐をする(民数35:24etc.)、贖って自分のもとに取り戻す、などがある。この最後の意味の用例は、興味深いことにヨブ記にあり、「わたしの生まれた日は […] 暗黒と死の闇がその日を贖って取り戻すがよい」(3:3-5)と、用いられている。

第二に、これが誰に言及しているのかについては、①神、②神以外の第三者かで意見が分かれる。ジャンセンはヨブを贖う近親<sup>12)</sup>と解釈している。サーディアもこれを人間と見ており、23節でヨブが願ったように彼の無実を書きとめて子孫に伝えてくれる者のことをさすと、解釈している<sup>13)</sup>。また、中澤治樹は、これを、16:20の「仲保者」同様、神に対しヨブを執り成し復権させる天上の希求的存在であると見ている<sup>14)</sup>。

本論ではわれわれは、「贖う者」を「神」と解釈し、ヨブを自分のもとに取り戻す、ヨブを救う「贖い主」ととりたいたい。ここでヨブが表明しているのは、結局、今は自分を攻撃する神自身が自分ヨブを苦しみから救い出す「贖う者」として来なければならないという確信である<sup>15)</sup>。そう解釈する根拠のひとつは、この「**נֶאֱלֵם**」がおそらく旧約聖書に34回現れる「**נֶאֱלֵם**」主は生きておられる」という、ヤハウェへの信頼を表す誓いの言葉を意識した表現であり、ヨブ

がここで自分の贖い主とヤハウェとを同定している信頼の告白であると読めることである。しかも、後述するように、ここには、贖われる対象をヨブ自身のみに限らず、神を信じる他の者たちにも広げて「私の信じる贖い主なる神」という意味合いも暗示される。9章33節では、ヨブは、神と自分との間に「仲介者」を願っていた。しかし、ここでは神こそが自分の贖い主だと見始めている。他の解釈者の中には、「神はわたしに向かって怒りを燃やし、わたしを敵とされる」(19:11共同訳)を根拠に、この「**נֶאֱלֵם**」を、ヨブが神に攻撃されて受けた損害のために「罪深い敵に復讐」<sup>16)</sup>をなす者、ととる人もいるが、19:11は、文字通りには、「敵のように見做す」であり、それは、神が実際にヨブを「敵とする」のとは異なる。ヨブは神を「罪深い敵」とは見していない。

「塵の上に」(共同訳)「**עַל-עָפָר**」の、「塵」は、ヨブ記に多出する語であり、「**עַל-עָפָר**」の形では、死んで塵となり、塵の上に横たわっている状態の人間を示す用例が多い(17:16、20:11、21:26、34:15)。特に、悔い改めの塵(ヨブ42:6)や創世記3:19との連想で、罪と結びつき死すべきものとなった状態の人間を思わせる。ここで、「塵の上に」とは、「**עַל**」を against の意味にとり、人間がそのような「塵のような者であるにもかかわらず」、人間の罪性に「対峙して」、という意味にも解釈できる。しかし、「**עַל-עָפָר**」に関してそれよりもさらに妥当に思われる解釈は、新共同訳その他の多くの訳とは異なるが、ジャンセンの読みで、「**עַל**」を「～のために」<sup>17)</sup>ととる。そう読むことで、贖い主が「塵」(直接的にはヨブを指すが、広義には人間を暗示することが、26節で見えてくる)のために立つという希望を明示する。

「立ちあがる」(**קוּם**)<sup>18)</sup>は、神に用いられると、神が自らの民を救うために現れる神顕現をあらわす術語である<sup>19)</sup>との指摘がある。加えて、この「立つ」に、(裁きの場などで)証言者として「立つ」という<sup>20)</sup>意味を読むことも正

しいであろう。この25節をジェームズ訳（欽定訳）聖書は、For I know that my redeemer liveth, and that he shall stand at the latter day upon the earth（私は知っている。私の罪をあがなう方が生きている事を。そして、彼が後の日にこの世にいらっしゃるであろうことを）としており、それがヘンデルのメサイアでイエスの復活と来臨の希望を語る文脈で用いられたことから、この箇所はイエスに関する預言のようにイメージされてきた<sup>21)</sup>。しかし、עֶפֶרを「塵」ではなく、「この世」と読み、イエスの来臨を読むことは、あまりに強引なキリスト証言の読み込みであろう。

#### 19:26

前半は、「ここで私の皮が剥ぎ取られた後、肉の中から私は神を見るだろう」と解釈する。זאתには、指示代名詞「この」という意味もあるが、その意味なら女性形なので、עוֹרִי（男性名詞）「（わたしの）皮」を修飾することは困難であるため、「ここで」、ととる。「皮膚が損なわれる」（新共同訳）と訳されているעוֹרִי נִקְפָּפוּは、字義通りには「私の皮膚が剥ぎ取られた」という意味で、レビ記1:6、7:8などから、神への焼き尽くす献げものとされる動物を屠る前に、まずその皮を剥ぎ取るという作業を連想させる。（この意味でとれば、後のヨブの嘆き、「わたしの皮膚は黒くなって、はげ落ち／骨は熱に焼けただれている」（30:30）はヨブが熱病に罹っていたことを感じさせる描写である一方で、焼き尽くされる犠牲としてのヨブが暗示されると解釈され、一貫する。）焼き尽くす献げ物は、他の者の罪を贖うのであるが、それ自体は無傷の者でなくてはならない。ヨブは、ここで、自分を無垢で無傷の者でありながら他の者の罪のために苦しむ贖罪の犠牲に重ね合わせているかのようである。ここに至り、ヨブの贖いは、他の人の贖いの様相も帯びる。それは、第2イザヤの苦難の僕、特にイザヤ書53章10節の「病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望ま

れ、彼は自らを償いの献げ物とした」に通じるもので、無垢の人の苦難が他の者の贖罪になるという既存の思想があり、そこに依ると考えられる。そうしてヨブは、自分は、皮膚が剥がされ死に瀕しても神を見るであろう、という確信を表明する。

この26節についてはサーディアが他の注釈者と大きく異なる見解を出していることを指摘できる。彼は25節の「贖い主」を彼の無実を伝える人間と採ったことに和合して、ここのאֲחִיזָה אֱלֹהִיםを「私は神を証言する、つまり、人間たちに知らせる、という意味である」と解釈する注を施している。そのことによって、25-26節全体は、「神の力と神が義しい者をいかに苦しめるかとを人間たちに知らせることによって、人々が苦しみにも勇ましく耐えることができるようにすることがヨブの目的である」と伝えている、というのがサーディアの読みである<sup>22)</sup>。彼の読みは、ヨブが自分の苦難に積極的な意味を見出し始めていることを読み取っている点で興味深い。彼の言葉が伝えられることが後世の人々の忍耐の手本となるためであるということを支持する文言はヨブ記のテキスト内には見出されず、サーディアの読みを採ることは困難であろう。

מִמֶּנִּי מִבְּשָׂרִיについては、מִןをfrom（から）をとるか、out of（を離れて）をとるかによって、死後に見るのか、生きて見るのか、もし死後とすれば復活して見るのか否かが、問題にされている<sup>23)</sup>。われわれは、「生きて見る」ととりたい。なぜならば、ヨブは一貫して死後の世界を否定しており（7:8, 9:21）、皮を剥がれても生きている自分が見るととる方がおそらく自然だからである。旧約聖書には、明確な復活の思想はないと考えられ<sup>24)</sup>、まして、終末をまたずに体の甦りを信じることは、イエスの宣教使信に至るまではないと考えるべきであろう。

なおここでのאֱלֹהִים「神」は、通常の複数形אֱלֹהִיםではなく、異教の神を指して用いられる単数形であるが、詩篇でも用いられている詩

文の形でもあり、ヨブが特に異教の神を指していると考えする必要はない。あるいはこれは、ヨブ記をウツの地に設定したと整合させるために著者が意図的に用いた形かもしれないが、それでも概念的にはヤハウェと同定できる。

#### 19:27

וְלֹא־זָרְךָ (他) は、文法的には、זָרַךְ 「他人である」の現在分詞ととり、否定のלֹא を伴って形容詞的に「他の誰でもなく」という意味でとることも可能である(新改訳、新共同訳、RSV、KJV、ヴルガータの解釈)。しかしわれわれはむしろ、同形の三人称男性単数完了形で「彼は他人ではなかった」(NJBの解釈)という意味に解釈したい。そしてその主語はヨブが見た神を指し、ジャンセン<sup>25)</sup>やTEVの解釈のように、25節の贖い主と対応するとするのが妥当であろう。אֲנִי は、「わたしが」を強調するもので、ヘブライの思想では肉体と魂を分けることをせずその両方が揃って自己であると見られていたことを考えると、26節的 מִבְּשָׂרִי が、「肉体から」の意味であることが裏付けられる。לִי は、「わたしに関して」「わたし自身が」などの解釈があるが、「自分自身で」の意味に加え、神が「わたしの側に」立つのを見る、という理解<sup>26)</sup>は、妥当に感じられる。「わたしが見る」(新共同訳)と訳されているרָאִיתִי は完了形であるから、ヨブは、このことがすでに実現したとの確信を持って、すでに心の中では見ているのである。27節は、「わたしが、わたしに味方してくれる方を見る。わたしの目が見た、そして、彼は他人ではなかった」と解釈する。

כָּלִיָּהּ כָּלִיָּהּ (腎臓) が感情の宿るところと考えられているところから、「心が焦がれる」(口語訳、NKJ、NIVなど)「思いは絶え入る」(新改訳、NJB、RSVなど)ともとれるが、字義通りの意味で「腎臓が消耗した」ともとれ、先に30:30に言及して見た、骨が焼けるような苦痛を伴う病気にヨブが罹っていた

ことを示すともとれる。贖い主を見た文脈では、腎臓が特に犠牲の捧げ物として神の好む部位であった<sup>27)</sup> ことと、כָּלָה に、「完成する、成就する」などの意味があることから、自分の苦しみは贖罪の犠牲としての働きを成就した(完了形である)という意味を含蓄するとも考えられる。そのように考えると、ここでもまた、ヨブの苦難に贖罪的な意義を見る読みが支持されるのである。

#### 19:28-29

ヨブは自分の義を確信した。その確信から、彼は、自分を裁くような発言をする友人たちに対して、自分を正しい裁き手の側に置き、友人たちを裁かれる立場において語るようになる。ヨブは究極的な裁き手である神の代弁者に自分を任じてしまう。最終的にヨブは、これら友人のための執り成し手となり、秘儀的には、ヨブが苦しみを経て贖われたことが、友人たちの贖いにもなるのだが(42:8-10)、このときにはまだ、ヨブはそこまでは悟っていないのである。

### <結論>

20章以降、ヨブの言葉には、善人の苦難を許す神への抗議(21:7;24:1)、友人たちの偽善性の告発(26:29)、自分の現在の苦境についての嘆き(30章)、そして自分を無実とする正しい裁きが行われることを求める訴え(31章)が激しく表明される。最終的には、ヨブは神との出会いによって被造物としての自分の存在を知り、神との出会いそれ自体に言語を超えた理解と答えを与えられる。そして彼は、自分の苦難に関して神に訴えることさえやめてしまう。究極のところヨブの嘆きは、逆境を、自分がもはや神の顧みを受けていないしと理解したことにあつた。「29:2 どうか、過ぎた年月を返してくれ／神に守られていたあの日々を。29:3 あのところ、神はわたしの頭上に／灯を輝かせ／その光に導かれて／わたしは暗黒の中を歩いた。

29:4 神との親しい交わりがわたしの家にある／わたしは繁栄の日々を送っていた。29:5 あのところ、全能者はわたしと共におられ／わたしの子らはわたしの周りにいた。」

物質的繁栄は、それ自体よりも、むしろ神が自分とともにいるということの証として彼に幸福をあたえていた。神がともにいるということは、エジプトの荒野をさまよっていた時代から、救い主を「イマヌエル（「神われらとともにいます」という意味である）」と呼び待望するイザヤ（7:14、8:8,10）から新約まで（マタイ1:23）一貫してイスラエルの民の幸福感の源泉であり、ヨブにもそれは当てはまったのである。神にじかに語りかけられたこと、神が答えてくれたことそれ自体が彼の問いや不満を消し去ってしまう。

ヨブ記が苦難の問題に対するひとつの明確な答えを提示しているということとはできない。なぜサタンがヨブを試みることを神が許したのかも説明されず、サタンが罰せられたという話もない。本論で読み取ることができた「他人のための贖罪の苦難」というモチーフは、決してヨブ記の結論になるほど一貫してこの書の流れているものではない。これはひとつのモチーフに過ぎない。しかし、旧約聖書のイザヤ書52-53章に顕著ないわゆる「苦難の僕」のモチーフ、無実でありながら他の者の罪を贖うために苦しむ義人のモチーフ、あるいは思想が、ヨブ記の中にも見出され、本論で扱った19章の、特に25節から27節を中心に展開されると示唆したい。

（本稿には、2008年度二松学舎大学教育研究助成をうけて収集した資料の一部を用いさせていただいた。感謝とともに記しておきたい。）

## 注

- 1) ヘブライ語原文は *Biblia Hebraica Stuttgartensia* 5 Auflage (Stuttgart, 1997). 邦訳は、『聖書』（新共同訳）（東京：日本聖書協会、1996）を用いた。

- 2) マックス・ウェーバー『古代ユダヤ教』（下）内田芳明訳（東京：岩波書店、1996）、pp.731-734；大貫隆『イエスという経験』（東京：岩波書店、2003）、pp.156-157.
- 3) John K. Roth, "A Theodicy of Protest," Stephen T. Davis ed., *Encountering Evil: Live Options in Theodicy*, 2nd ed. (Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press, 2001), pp.1-20.
- 4) Saadia Ben Joseph Al-Fayyūmī, tr. *The Book of Theodicy, Arabic translation and commentary on the Book of Job*, translated from the Arabic with a philosophic commentary by L.E. Goodman, Yale Judaica Series Vol. XXV. (Yale University Press, 1988), p.250.
- 5) Saadia, *The Book of Theodicy*, p.402.
- 6) Saadia, *The Book of Theodicy*, pp.250-251.
- 7) Elie Wiesel, *A Jew Today*, translated from the French by Marion Wiesel (Vantage Books, 1978;1979), 210-211.
- 8) A. ワイザー『ATD旧約聖書註解 11 ヨブ記』松田伊作訳（東京：ATD・NTD聖書註解刊行会、1982）、p.261.
- 9) 「子供に」は原文では **לְבָנִי**。文字通りには、「私の息子たちには」であり、ヨブの息子がすべて死亡しているという1章18節と矛盾する発言ではある。しかし、これはヨブの誇張的表現として理解すべきで、論理的な整合性を求めるべきではないであろう。
- 10) John E. Hartley, *The Book of Job, The New International Commentary on the Old Testament* (Grand Rapids: Eerdmans, 1988), p.291.
- 11) 申命記25:5-6「兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない。亡夫の兄弟が彼女のところに入り、めとって妻として、兄弟の義務を果たし、彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならぬ」に従って家名を存続させるための結婚。
- 12) J.G.ジャンセン『ヨブ記』飯謙訳（現代聖書註解）（日本基督教団出版局、1989）、pp.208.
- 13) Saadia, *The Book of Theodicy*, pp.288-289.
- 14) 中澤治樹『ヨブ記：新訳と略註、1991』（新教出版社、1991）、p.76.
- 15) 並木浩一、勝村弘也訳『旧約聖書XII ヨブ記、箴言』（岩波書店、2004）p.325の解釈。また、John E. Hartley, *The Book of Job*, p.293もヨブがここで信仰告白的に神を考えていると理解している。
- 16) J.L.メイズ編『ハーバー聖書註解』（東京：教

- 文館, 1996), p.453.
- 17) J.G.ジャンセン『ヨブ記』飯謙訳(現代聖書注解)(東京:日本基督教団出版局, 1989), p.218.
  - 18) 本文中קָנִי (カル形未完了3人称男性形単数)。
  - 19) ワイザー, p.272.
  - 20) N.C.ハーベル『ヨブ記』(ケンブリッジ旧約聖書註解12)高尾哲訳(東京:新教出版社, 1994, p.96.
  - 21) J.G.ジャンセン『ヨブ記』, p.229.
  - 22) Saadiah, *The Book of Theodicy*, pp.288-289.
  - 23) 「肉体の中から」と見る見方が多く、KJV、NIV、RSV、タナック、ヴルガータ、ジャンセン222。「肉体を離れて」と見るのは、Einheits Ersetzung (1980)。「肉の中から」という見方の中では、「死後復活をして」という見方が、伝統的にキリスト教徒の中でとられており、その解釈によって、ヘンデルは「メサイヤ」にこの箇所を用いている(ワイザー274)。
  - 24) 人間が死後の世界で報いを受けるという考えの萌芽は、エゼキエル書(32:18-32)で、死後の報いとして悪人は黄泉の低いところに横たわることが書かれているところに見出せるが、この箇所の「横たわる」という文言からは、必ずしも終末の復活と報いを読み取ることが出来ず、永遠に「横たわって」いる状態も考えられる。
  - 25) ジャンセン, p.223.
  - 26) ジャンセン, p.223.
  - 27) כְּלִיָּהּ の含意については、BDB כְּלִיָּהּ の項参照。

## 参考文献

### <聖書・辞書>

- 『聖書』(新共同訳). 東京:日本聖書協会, 1996.
- Novum Testamentum Grace*, ed. B. et K. Aland, J. Karavidopoulos, C. M. Martini, B. Metzger, 27 revidierte Auflage (Stuttgart, 1993).
- Biblia Hebraica Stuttgartensia* 5 Auflage (Stuttgart, 1997).
- Bible Works 5 for Windows: Software for Biblical Exegesis & Research*. Norfolk, VA: Bible Works, LLC, 2002
- Bauer, Walter *Greek-English Lexicon of the New Testament and other Early Christian Literature*, 3rd ed. Rev, ed, Frederick William Danker (Chicago: Univ. Chicago, 2000).
- Liddell, Henry George & Robert Scott. *Greek-English Lexicon*. 9th ed. Rev. with a revised supplement by Henry Stuart Jones (Oxford: Oxford Clarendon Press, 1996).

- Liddell, Henry George & Robert Scott. *Greek-English Lexicon*, Abridged Edition (Oxford: Oxford Clarendon Press, 1986).
- Brown, F. S. R. Driver & C. A. Briggs, *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon: With an Appendix Containing the Biblical Aramaic* (Peabody, Mass.: Hendrickson, 1997). (脚注中、BDBと省略)
- <注解書および研究書>
- Atkinson, David, *The Message of Job: Suffering and Grace*, In *The Bible Speaks Today*, Series Editors J. A. Mortyer (OT) and John R. W. Stott (NT) (Leicester, England: Downers Grove, Illinois, USA: Inter-Varsity Press, 1991).
- Gaon, Saadiah Ben Joseph Al-Fayyūmī, tr. *The Book of Theodicy*, Arabic translation and commentary on the Book of Job, translated from the Arabic with a philosophic commentary by L.E. Goodman, *Yale Judaica Series* Vol. XXV. (New Haven: Yale University Press, 1988).
- Hartley, John E. *The Book of Job*, The New International Commentary on the Old Testament (Grand Rapids: Eerdmans, 1988).
- Wilcox, John T. *The Bitterness of Job, a Philosophical Reading* (Michigan: The University of Michigan Press, 1994).
- ギブソン, J.C.L.『ヨブ記』(デイリー・スタディー・バイブル 12) 滝沢陽一訳(東京:新教出版社, 1996).
- グティエレス, G『ヨブ記:神をめぐる論議と無垢の民の苦難』山田経三訳(東京:教文館, 1990).
- ゴルデイス, ロバート・『神と人間の書—ヨブ記の研究』船水衛司訳(上・下)(東京:教文館, 1977(上), 1979(下)).
- ジャンセン, J.G.『ヨブ記』飯謙訳(現代聖書注解)(東京:日本基督教団出版局, 1989).
- 中澤洽樹『ヨブ記:新訳と略註, 1991』(東京:新教出版社, 1991).
- 並木浩一『「ヨブ記」論集成』(東京:教文館, 2003).
- 並木浩一、勝村弘也訳『旧約聖書XII ヨブ記、箴言』(東京:岩波書店, 2004).
- ハーベル, N.C.『ヨブ記』(ケンブリッジ旧約聖書註解12)高尾哲訳(東京:新教出版社, 1994).
- バルト, カール『ヨブ』ゴルヴァイツァー編・解説西山健路訳新(東京:新教出版社, 1969).
- メイズ, J.L.編『ハーバー聖書註解』(東京:教文館, 1996).
- ワイザー, A.『ATD旧約聖書註解11ヨブ記』松田伊作訳(東京:ATD・NTD聖書註解刊行会, 1982).